

日高六郎研究序説

— 「社会心理学」に根ざす戦後啓蒙の思想 —

宮 下 祥 子

戦後史・戦後思想史研究において頻繁に引用されながら、固有の知識人としては従来ほとんど論じられてこなかった日高六郎の学問・思想・行動を明らかにする必要がある。日高はマルクス主義の有効性を認めつつ、マルクス主義者の党派性と下部構造決定論の発想を一貫して批判した。日高が追求したのは異質なものの衝突による思想創造であり、サークル運動がパーソナル・コミュニケーションの場を創出することによって、日本の社会意識を変革する基盤となることに期待をかけた。フランクフルト学派やアメリカ社会心理学の発想と方法が日高の戦後啓蒙を支えたが、同時に、心理学の学知が規律権力となることの危険を1950年代から指摘していた。また日高の社会心理学のパースペクティブに根ざした学校教育へのコミットは、彼の思想の核に関わる重要性を帯びていた。歴史性を重視し、社会構造のなかの人間を思想史的にまなざす日高の主体観は、自立した強い主体を希求した戦後思想のなかにあって、独自の位置を占めている。

はじめに

2018年6月、日高六郎が101歳で死去した。戦後日本における最後の戦中派知識人だったとも言える日高は、1917年青島に生まれ、東京帝国大学で社会学を専攻し、陸軍を除隊され東大助手となり28歳で敗戦を迎え、社会学者・評論家として長きにわたり社会的発言を続け、また多くの人々を結びつけてきた。新聞各紙の訃報記事は日高について、「戦後市民運動リード」、「反戦市民運動の旗手」、「リベラル派社会学者」、「戦後民主主義を体現」、「市民目線 行動貫く」等の見出しで、その生涯を伝えた¹⁾。

戦後史あるいは戦後思想史研究に取りくむ者で、日高の名を知らない者はいない。日高が描く同時代史の見取図や戦後思想の解説は、戦後を問うさまざまな研究において、実に頻繁に引用されてきた²⁾。また新聞各紙が伝えるように、運動や実践に身を置く多くの人々が、日高に影響を受けてきた。しかし一方、日高その人を固有の戦後知識人として論じる研究は、今日まできわめて少ない³⁾。日高自身が戦後史の只中に身を置いてきたア

クターのひとりに他ならないのだが、日高の描く戦後史・戦後思想史は、しばしば「先行研究」として読まれ、依拠されてきた。この欠落と過剰は、何を意味するのだろうか。

政治学者の宇野重規は、日高を丸山眞男らと並ぶ「戦後民主主義」の代表的論者、あるいは「進歩的知識人」の代表的存在としつつ、現在では「戦後民主主義」や「進歩的知識人」という言葉自体の意味がわかりにくくなっており、「同時代的な影響力に比して、日高は、今日ではややその存在の輪郭が見えにくい知識人の一人である」と述べている⁴⁾。宇野の理解が妥当ならば、いま見えにくくなったその「存在の輪郭」に目をこらすことで、わたしたちの「戦後民主主義」理解の、何かが変わるのではないか。

「進歩的知識人」「近代主義者」「市民運動の旗手」といったラベルで評され、あるいは良く言えば穏健なジェネラリスト、悪く言えば「まだるっこしい」⁵⁾等と認識されてきた日高六郎とは、果たして何を考え、何をなした人物だったのか。これらのラベルは、日高その人をよく表し得ているか。本稿の主張をあらかじめ述べるならば、日高の存在の根幹にあっいま見えにくくなっているものとは、彼の学問——「社会心理学」⁶⁾——、およびその思想である。そしてそれこそが、いま日高六郎を顧みることの意義の核心でもある。

本稿では、戦後日本の知的風景のなかで比類なき個性と独自性をもつ知識人としての日高の、学問・思想・行動の総体に迫っていくための論点を示したい。まず日高の思想形成と戦後の出発について要点を述べ(第1章)、次いで「社会心理学」のパースペクティブが日高の根幹をなしていたことを論じる(第2章)。そして日高が「行動する知識人」となっていく過程で、学校教育に深くコミットしたことを示す(第3章)。日高にとって教育とは、他のさまざまな問題や運動に関わった経験——たとえば、思想の科学研究会、「近代文学」、サークル・生活記録運動、国民文化会議、原水禁運動、安保闘争、ベトナム反戦運動、日韓・在日朝鮮人問題、沖縄問題、被差別部落問題・狭山事件裁判、市民・住民運動、水俣病問題など⁷⁾——にも増して、彼の思想の核に関わる重要性をもつものだったのであり、そして教育をめぐる彼固有の啓蒙は、「社会心理学」と不可分であった。

以下、日高の同時代における発言と後年の回想を主なテキストとして引用し⁸⁾、いまでは見えにくくなった戦後啓蒙の重要な一側面に光をあてていく。

1 思想形成と戦後の出発

1.1 思想形成

日高は折に触れて、「マルクスを尊敬する非マルクス主義者」を自称した。

日高の父親は日高自身の回想によれば、東京外国語専門学校シナ語科を修了して北京の日本公使館に勤務し、やがて職を辞し商社を立ち上げ、青島に移り住んだ人物であった。国家神道以前の「神ながらの道」を信仰する保守・伝統主義者であり、天皇を敬愛するゆえ、天皇を利用して勢力拡大をはかり侵略を重ねる軍部や政治家を批判する立場を一貫した。1943年に鎌倉に引き上げるまで、中国の人々と親しくつきあい、同時に彼らから日本帝国主義の不当性について直接の異議申し立てを受けてもいた。「日本国家の膨張主義をみとめる「アジア主義」ではなく、アジア諸国の解放を願う理想主義的アジア主義を考えていた」という⁹⁾。青島の日本人学校に通った日高は、家事使用人や父親を訪ねてくる中国の人々と交流したが、中国語を学ぶことは禁じられた。

東京文理科大学哲学科に進んだ兄の影響で、青島に暮らす中学生の日高は、マルクスを読みはじめる。また後にブハーリンの「社会学」を読み、彼を「学問の国際性に敏感」な「ソヴィエトのなかの異色のマルクス主義者」と考えた¹⁰⁾。マルクス主義文献の読書体験について後年の日高は、次のように書いている。「その魅力は、未分化のものであった。そこには、認識のよろこびもあれば、善悪のけじめを学びなおしたという驚きもあれば、行動への指針もあれば、愛情の意味の新しい見なおしもあった」¹¹⁾。またマルクスに先んじて、日高はトルストイとクロボトキンに夢中になっていた。「中学生の私の頭のなかでは、クロボトキンとマルクスとは決して対立していなかった」¹²⁾。学問によるラディカルな社会変革を志したマルクスと、素朴なまでのヒューマニズムで行動し続けたクロボトキンの生涯への敬愛は、「行動する知識人」日高の、核をなしていたように思われる。とくに地理学者となる道を捨て、自らの地理学上の発見を可能にした社会的特権の万人への解放に向けて東奔西走したクロボトキンへの共感、日高の生涯を考える上で重要だろう。

それぞれ異なる思想をもつ父と子どもたちは、しかし戦争への明確な批判という点で一致していた。家庭のなかで議論しあい、自己と異なる意見をもつ他者に敬意をはらう関係性のなかで、日高は早熟な知性を育んだ。自らが支配民族であることの認識を深めながら、なおかつ開かれた家族のなかで育ったことが、日高の思想を方向づけた。

やがて東京に移り、東京高等学校、東京帝国大学へと進学する。兄のひとりとは徴兵さ

れ、戦死した。1942年、肺炎で陸軍を除隊された日高は東大助手となり、1944年には海軍技術研究所の非常勤嘱託を勤める。そこで日高は侵略戦争への批判と植民地解放・国内民主化等を主張する「国策転換に関する所見」を作成して1945年7月に海軍技研に提出し、終戦の3日前に解職された¹³⁾。

戦時下の1944年に公表した論文「集団の封鎖性と開放性について」のなかで、日高は次のように述べる。

封鎖的あるいは開放的集団という時、ひとは直ちに、家族、村落等を一方に、経済的結社、大都市等を他方に思い浮べる。そしてこのことは又テニイスの著「ゲマインシャフトとゲゼルシャフト」〔…〕を想起させるであろう。われらは、この社会学徒にとっての常識を、又テニイス以後時としては機械的分類的に使い古されて生気を失ったとさえ思われるこの対立概念を、克明に繰り返したくない。〔…〕封鎖性とゲマインシャフト、開放性とゲゼルシャフトと、あまりに容易に結びつけられ対立せしめられて、具体性を内に孕むことなく空転するようになったこれらの抽象的概念を、生き〜とした有機的連関にまで救い上げ、その多様な現象形式を追求しなければならぬ。¹⁴⁾

日高は生涯一貫して、「機械的分類的に使い古されて生気を失った」、「具体性を内に孕むことなく空転するようになった」、つまりスタティックな抽象概念に対して、冷淡であった。この論考で日高はベルクソンに依拠しつつ、むしろゲマインシャフトのうちに「開いた魂」を、ゲゼルシャフトのうちに「閉じた魂」を見出していき、集団を開いたり閉じたりするところの「知性」と「情緒」のはたらきを考察している。社会学者・作田啓一は1965年に執筆した「日高六郎論」のなかで、日高のこの論考について、「日高氏は、すでにその最初の労作において、個別者と普遍者とをダイナミックに関連させる方法論をもって出発している」と論じている¹⁵⁾。

日高は社会学を志した当初より、社会学に深い疑念をもっていた。「社会学にたいして、絶望したいほどの不満を持っていた、何度か社会学を見すてようと思った。ほくはいまでも社会学にたいして割りきれない不満を持っている。〔…〕戦争という重大なことがらについて正確な分析や見透しもあたえ得ないような社会学が、一体どこで人々の要求と結びつくことができるかと考えると、なにか信頼できなかつた」¹⁶⁾。このような社会学への批判を抱きつつ、日高は東大文学部社会学研究室の助手となり、やがて戦後に文学部

から独立して発足した東大新聞研究所で、助教授（1949年）、教授（1960年）となっていく。

1.2 知識人論、マルクス主義批判

日高の戦後は、次のような自己意識から出発した。「認識をもちながら行動しなかったものは、知らずに国家方針に同調したものよりもだめな人間だという気持が、私をひかえ目にさせた」¹⁷⁾。左派知識人のいわゆる「悔恨共同体」に日高も属しており、その悔恨は日高に、自己を問うことを徹底させた。1949年に『きけ わだつみのこえ——日本戦没学生の手記』が刊行されベストセラーになると、日高は『わだつみのこえに答える』という感想文集に寄せた文章のなかで、「戦没学生の手記は美談ではなく、抗議である。しかし抗議に感動するためには、みずからが抗議する精神を持たなければならない」と述べ、戦死した兄や友人を悼みながら、「私はいまはすでにその仲間から落伍しかけているのではないか」と書いている¹⁸⁾。占領改革のなかでにわかに発される「民主主義」の掛け声に日高はきわめて懐疑的であり、そして疑念は誰よりもまず、自己に向けられた。

同時に日高は、日本の知識人の複雑に屈折した心理を分析した。マルクス主義の知的権威は獄中非転向の共産党員の威光と相まって戦後数年のあいだ強烈な求心力を有していたが、そのなかにあって日高は、次のようなマルクス主義への問いを『近代文学』上に書いている。

私は思うのである。彼等〔今日のインテリゲンチヤ〕の頭のなかにあるのは思想ではなく、その解説であり、考えるということではなくて教えるということであることを。勿論あらゆる偉大なる思想には、それを支える地盤がある。言いたければ、それを「下部構造」と名づけてもよいであろう。そしてそこから二つのことが引き出される。第一には、如何なる思想もこの地盤に支えられて初めて十分に力強いと言うこと、第二には、しかし如何なる思想も、この地盤によって限定され制約されているということ、この積極と消極との、いわば諸刃の二面をである。しかしこのことが成立するためには、思想はただ下部構造の巨大な歯車に附属した小さな歯車であるという前提条件が必要である。もし真実の思想と下部構造との間に、どのような形のものであれ、ある軋みが存在するならば、この諸刃はどこかで折れるのではないか。¹⁹⁾

戦後日本におけるマルクス主義の、やがて公式化し硬直化していった経済決定論の発想に対する問題提起が、1947年の時点でなされている。下部構造に対する「思想」の自律性の追求は、まず現実に存在するマルクス主義者の「安易」さを直球で批判し、「考えるということ」を要請するところからはじまった。

インテリゲンチヤとは考える人間である。考えることを放棄して真実のインテリゲンチヤは存在しない。しかし考えるということは如何に困難な作業であることか。かつて自由こそは考えるための空気であるとひとは信じていた。しかし八月十五日は我々にその空気をあたえてくれた筈であるのに、ひとは考えることを始めようとはしなかった。彼は自由な人間として発言することの困難に初めて直面したのである。[…] 絶望と安易とは背中合せである。われわれは日毎にわれわれの将来に「絶望」する多くの人達に出会う。彼等は様々の「客観的条件」を教えてくれるが、それは彼等を安易にしてくれるからである。[…] 彼等を待ちうけているものは恐るべき孤独と絶望とではない。彼等の精神はますます円満にすべこくなってゆくだけなのである。彼等は最後まで考えることをしなかった。[…] そして彼は、解決し得ない問題の解答を、すなわち彼にとって解決しなくてよい問題の解答を、紹介しようと気がまえている。²⁰⁾

「絶望と安易とは背中合せである」という認識、絶望することの安易さへの自戒が、「行動する知識人」としての日高を、一貫して駆動していたのではないか。

絶望への自戒は同時に、日高がベルクソンのオプティミズムをむしろ高く評価することに接続する。「ベルクソンとデモクラシーの心理学」という1946年の論考のなかで日高は、「人間そのもののうちに潜む人間の可能性を信じている」ベルクソンのオプティミズムには、さまざまな異論や疑問が提出されるであろうことを述べながら、それでもなお「オプティミズムが時としてゆるぎない地盤に根を下すことがあるということも忘れてはならない」と言う。そしてベルクソンにとって「最も肝要なのは開いた魂であり、それのみである」一方、デモクラシーのためには「[ルサンチマン]と「憎悪」こそが要求される真実の徳であると主張する」マルクス主義者たちは、「デモクラシーの心理学ではなくて、むしろ論理学」を追求しているとする。「論理家と心理家のいずれが正しいかは誰も真実には知っていない」と述べながら、日高は明らかにベルクソンに強く惹かれており、「われわれの周囲に論じられているデモクラシー論の多くが、論理学に終始してい

るという事実」を指摘する²¹⁾。

マルクス主義者に対するこのような敗戦直後の違和について、日高は戦後15年が経ったとき、著書の「あとがき」で次のように振り返っている。

当時私は戦後の進歩的運動が、人間のこまやかな意識や心理のひだをあまりに無視した形で指導されていると感じていた。〔…〕人間はもちろんなによりも「社会的存在」であるけれども、しかしその「社会的存在」であるということの意味は複雑だと思う。「存在が意識を規定する」と言っても、その規定の仕方は決して簡単ではないと思う。そのことを、じつは敗戦という激動期に、多くの知識人が生身で体験したはずだった。存在と意識とのあいだにあるじつに大きなきしみ、ずれ、うらぎり。それを経験した人間が、もう一度「存在は意識を規定する」というとき、その意味はマルクス主義の教程本風にはなく、もっと複雑で屈折に満ちたものになってしかるべきではなかったか。〔…〕私はマルクス主義だけではなく、フロイト風の発想や、それにつれて「社会心理学」的方法や、あるいは実存主義的な問題意識などにも近づいた。そして私はそれらの発想が誕生してくる必然性を発見しないわけにはいかなかった。私はむしろマルクス主義者がどんらんにごうした思想を、自分自身の体系のなかにとかしこむことを期待してやまない。それこそが二〇世紀後半にふさわしい創造的なマルクス主義を生みだすだろう。思想の純潔性ではなく混血性が、——かつてマルクスが、ドイツ観念論とイギリスの経済学とフランスの社会主義思想を混血することで、もっともユニークな思想体系をつくりだしたように——思想をきたえ、ゆたかにする。異質のものの衝突なしに、つまりは思想それ自体の内部矛盾なしに、思想は発展しない。ところが、こうした混血以前に、衝突以前に、ある思想の「純潔性」だけがその思想の価値として評価されるような空気があったので、私はそれに抗議せざるをえなかった。²²⁾

ここで日高が思想の「純潔性」のみを重んじる風潮に抗議せざるをえなかったと述べるのは、具体的にはたとえば1959年、マルクス主義理論の発展を目指して創刊された雑誌『現代の理論』に対し、日本共産党が「修正主義」であるなどとして党員を処分し刊行中止に及んだ騒動がある。このとき日高は、「学問の自律性を党はどのように考えているか」と問い、「せめてほんもののマルクス主義者ならば、彼の主張を正当化するものは、事実以外にはないという、唯物論的原則に立ちもどってほしい」、「〔アカハタの〕虫メガ

ネ的な詮索の眼そのものが、じつに精神の衰弱以外のなにものでもない」等と厳しい批判を展開し、「私は、沈黙していることはマルクス主義者にとっても非マルクス主義者にとっても、有害であると判断した」、「この問題について、日本の知識人が口をとぎしてしまうようであれば、前途は全く絶望的というほかない」と文章を結んでいる²³⁾。

こうしたマルクス主義の党派性・教条性に対する批判は、60年安保以降も継続された。復刊された『現代の理論』における1967年の鼎談で、日高は次のように述べる。

マルクス主義のあの絶対否定のすさまじい批判的精神が、ひとたび自分自身に向うと、どうしてあれほど弱くなるのか。たとえば、スターリン主義の問題にせよ、中国の現在の状況にせよ〔…〕いわゆるマルクス主義者たちが、ソヴィエトなり中国なりをひたすらユートピア的にえがきだすのではなく、現にそれがだきかかえている諸矛盾をリアルに分析することも怠らなかつたとすれば、マルクス主義の科学性、客観性への信頼は現在ほどにはくずれなかつた〔…〕そして、そのことは決して社会主義革命の無意味を示すことではないと思う。〔…〕現状認識がつねに大本営発表的であって、リアルな科学的分析にたえ得ないということは、おそろべき知的頹廢だと思ふのです。²⁴⁾

理論と現実との乖離を直視し得ないマルクス主義者に向けて発せられる痛烈な批判は、それでもなお、日高がマルクス主義および社会主義革命に絶望していないことを示している。後の日高は市民運動について、次のように述べている。「積極的な意味をみとめるからこそ、逆にそこに見られるであろう、弱さ、問題性、欠陥について、徹底的に検討する必要があるのである。だが、無意味な価値について、その弱さや問題性や欠陥をあげつらう必要があるだろうか」²⁵⁾。これは市民運動のみならず、あらゆる問題に対して粘り強い批判を貫いた日高の、根本原理だった。批判ということが容易に非難・誹謗中傷に地滑りしていく土壌にあって、日高が一貫して追求したのは、思想創造と変革のためのクリティークであった。

なお初期の日高の論考は、後のものと比べて難解である。留保に別の留保を加え「しかし」の往還を重ねる文章のスタイルは、「考える」ことを徹底した当時の思考の軌跡を表しているようでもある。その日高が読み手に伝わりやすい文章を書くようになっていったのは、アメリカ占領軍の民主化政策が冷戦の激化とともに転換し、日米安保体制に組み込まれる保守陣営の「逆コース」が顕在化していく頃である。日高の文体はその

激動のなかで、しだいに文筆による状況介入という遂行的行為にふさわしい、平易なものに変わっていった。

1.3 「知識人と民衆」の断絶という課題

「逆コース」への危機意識は、日高を「知識人と民衆」の断絶という課題に対峙させた²⁶⁾。すでに1948年、「五分〔知識人〕と九割五分〔人民〕とが、分裂した二つの岸に、それぞれ安眠している」と指摘し、知識人の「危険はむしろ影響力がないのにも拘わらず、あるかのようにうぬぼれることである。東京の何百人かの文学青年だけがさわいでいるのに、日本中が大騒ぎしていると感^{ママ}ちがいすることである」²⁷⁾と述べていた日高は、「民衆」に向かうさまざまな実践を行っていく。「終戦直後、知識人がとくに占領軍の権威をかりて、古い日本に非難の言葉を投げつけたとき、一般の民衆には納得しがたいオりのようなものが残った」。そして「知識人および彼らの思想が民衆のなかにまだ根をおろしていない」。ただし、「知識人も、西欧の思想の伝達者という役割から、民衆の貴重な実感の支持と組織者という役割へ、少しずつではあるが動いている」²⁸⁾。1957年におけるこれらの発言には、日高の当為としての知識人観が率直に示されている。また日高は次のようにも述べる。知識人は「注意しないと、一種の「大衆崇拜主義」になりかね」ず、「大衆の中の悪いものも容赦なく指摘するという知識人の役割が忘れられがち」である。「いまの知識人には、大衆と断絶しているという“痛み”の感覚が案外うすいのではないだろうか」²⁹⁾。

こうした「民衆」の実感の組織者という役割認識は、日高がさまざまな現場に関わるなかで得た洞察に根ざすものだった。作田啓一は先述の日高論のなかで、1950年代後半の日高が、体験（実感、個別性）と理念（理論、普遍的原理）を媒介する「組織と運動の組み方に社会学者としての全力を傾け」るようになっていくという「力点の移行」を論じているが³⁰⁾、そうした学問と思想と行動が不可分な「行動する知識人」を生んだのが、戦後啓蒙という時代であった。

2 「社会心理学」に根ざす戦後社会への洞察

2.1 戦後初期「社会心理学」の発想

日高の業績として著名なのは、エーリッヒ・フロムの *Escape from Freedom*（1941年）の翻訳（『自由からの逃走』）であろう。1951年末に日本語訳を刊行し現在まで版を重ね

るベストセラーとなった本書は、当時フランクフルト学派の一員でナチに追われアメリカに移住した社会心理学者フロムが、ナチズムを支えた人々の「社会的性格」を資本主義やイデオロギーとの関係から捉え、デモクラシーが実現した自由という価値の重みや孤独に耐えかねた下層中産階級がむしろ権威への服従を選択する心理を、精神分析的方法も応用しつつ論じる、文明批評の書である。

日高はしかし、フロムが提示した理論にも一定の留保をもって臨んでいる。「新フロイト派」(フロムをさす)について日高は、「私はその科学性について疑問をもちながら、その発想のなかには無意味でないものがあると考えた」と述べる³¹⁾。科学性については疑問であるにもかかわらず日高が高く評価するフロムの発想とは、たとえば彼が変動期ドイツ社会を動かすものとして、(マルクス的な)社会経済的条件、(ヴェーバー的な)イデオロギー、(フロイト的な)社会的性格の3つをそれぞれ重視しつつ、社会的性格を、あらかじめ社会化された心理的次元の問題と考えて前景化している点である。戦後日本においては、「最初にデモクラシイというイデオロギーが入って来る。そして外側から社会経済的条件がいじくられる。ところが最後に取残されたものは日本人的性格で、これが猛烈な勢いで、社会経済的、あるいはイデオロギー的変革を邪魔している。このような日本人のイデオロギーと、日本人の社会的性格とのギャップを、フロム流に掘りさげるとおもしろい問題が出て来るのではないか」という問題関心である³²⁾。

日高が強い興味を示すのは常に、理論それ自体の体系性や科学性にも増して、執筆者にそれを書かした問題意識そのものの切実さや知的な真摯さといったことにある。『自由からの逃走』についても、「現代の中心的な課題ととりくんだ本書が、一九四一年という、第二次世界大戦のまっただなかで刊行されたという事実にも、フロムの熾烈な問題意識とむすびつけて、注意をはらう必要がある」と述べ、時代の課題に命を賭して向きあったフロムの「科学者の責任感」を、高く評価する³³⁾。

デモクラシーが根づきにくい日本社会の“前近代性”“半封建性”に知識人の関心が集中していた当時あって、日高もその圏域にありながら、同時にデモクラシーがファシズムの母胎にもなり得たという問題に着眼していたことは、日高が敗戦後いち早くベルクソンを論じながら閉鎖的なデモクラシーを批判したことと並んで、異色であった。しかし当時多くのマルクス主義者にとってみれば、アメリカ社会心理学などはいわば資本主義が生み出した体制補完の学知に過ぎなかったのであり、戦後啓蒙期、東大新聞研にひとつの拠点をもつ日高らの「社会心理学」は、一定の広がりや影響力をもちながら人文・社会科学の傍流を形成していた。

しかし早くから「社会的性格」への関心を有していた日高は、「多くのいわゆる社会科学的思想に馴れた人々によって、不当に看却されているのは、人間の生理と心理の深層の問題であり、それがいわゆるあらゆる社会問題に微妙にからんでいることではあるまいか」³⁴⁾と主張し、社会学のなかに心理学を取り入れる仕事を積極的に進める。農村社会学者・福武直との共著『社会学——社会と文化の基礎理論』（光文社、1952年）では、「欲求」「パースナリティ」といった項目をはじめとする個人心理学の基礎知識にまず紙幅を割り、それをベースに社会的現象についての記述を展開している。またアドルノとホルクハイマーが行ったイデオロギーとパーソナリティの相関関係についての研究を紹介する論考（1951年）では、日高は「この研究が従来われわれがなじんだイデオロギー論とは質的にことなった方法をとっていることを認めるべき」であり、「このような方法の有効性を真剣に研究しなければならない」とする。そして日本社会においては、「家庭的環境が、保守主義的権威主義的パーソナリティ形成のための温床となっている」と分析する³⁵⁾。

こうした関心から社会意識調査などの仕事を開拓していく一方で、しだいに日高は、(社会)心理学の発想と方法を日本社会の理解に適用することの問題性について、発言のウエイトを移していく。1956年の「心理学ブームの功罪」と題する座談会において、日高は「心理学ブームの責任はいくらか僕なんかに（笑声）百分の一くらいあるかもわからない」としながら、率直に危惧を表明している。以下、やや長いが引用する。

僕は戦後、社会学と心理学との提携ということを非常に強く言ったわけなんですよ。そして社会心理学的な研究というものが、これから非常に必要だということも言ったわけだ。なぜそう言ったかというとね、一つには、こういう価値体系の崩壊してゆく過程が始まっているときに、従来の社会科学的な構造論とか、あるいは階級論とか、そういうものだけじゃ解決、解釈できない問題が続々出てくる。僕たち日本人全体が、ものすごく色んな古い沈殿物を持っている。それをどう処理し、脱却し、新しい価値体系を自分のものにするか、今のはやり言葉でいえば自己改造するか。そう考えたとき、どうしてもある程度人間に対する、いわば鋭い心理学的な洞察というものが必要だ、ということになり、それでアメリカのものたとえばフロムのもんなんかを紹介したりしたわけです。それからマス・ソサエティの中で、自己疎外された人間の不安感というのもね。〔…〕それがなぜ心理学ブームというような形で出ていわば横道にそれたか〔…〕戦後、最初の社会科指導要領の中で人によく思われ

るような人間にならなくちゃいけない、これは非常に大切だということを言っているわけですね。で、そうすると、人によく思われるための技術の本というのが要求されるわけですね。〔…〕心理学と医学とか、心理学と社会学との提携ということは非常に大きな問題だと思うんですよ。それで一番良くないことは、全人間的に治療しているのでなくて、非常に表面的なところでゴマかすことに心理学が応用されているということなんだ。〔…〕アメリカの社会心理学を、日本で受け入れた場合の、その受入れ方にも随分問題があると思うんですよ。その場合に心理学者が勘違いしていた第一のことは、日本人が養われてきた、いろんな社会的条件とか、歴史的な沈殿物とか、そういうものを無視しちゃって、いわば人間というものを透明なものとして測定し処置するという立場にたって考えていたいわゆる心理学主義の誤謬というんですか、それが非常にあった〔…〕正しい形で、社会的な大きな場で解決して行かなければならない問題を、いわば個人のいろんな適応技術とか、心構えとかいったようなものだけで何とかうまくやってゆきなさい、環境にうまく適応してやってゆきなさい、ということになるわけですね。〔…〕学者の責任、ジャーナリズムの責任はたしかにあると思うんです。だけど、もう一つ、大衆の側にも、自分の精神的な不安を、極く簡単な形で解決してもらいたい、説明してほしいというような、相当強い要求があると思うんですよ。³⁶⁾

ここで日高が述べている「心理学主義」の問題性を大別すれば、その①技術主義と全人間性の喪失、②脱歴史性、③個人主義的発想がもたらす現社会構造の無条件肯定、ということになるだろう。また皮相な心理学ブームを支えるのは学者やジャーナリズムであると同時に、即効性ある処世術のバイブルを求める大衆でもあるという認識が表明されている。フロイト理論の流行についても、「人間の全的な、心理的な活動というものは、もっと高度で複雑なものであって、簡単に割切れるものじゃないだろうと思う」と述べ、「社会心理学というのはアメリカでは別として、日本では非常に重たい学問だと思うんだ。社会心理学というのは、本当にまじめにずっとやって行こうとすれば、それは日本の社会のいろんな背負ってる重たい荷物を引受けなければ、とてもどうにもならない」と主張する。

こうした発言は日高が心理学に大きな関心を寄せつつも、同時に社会のなかの「人間の全的な、心理的な活動」、すなわち思想という次元を追求した知識人であったことを示す。「イデオロギーとパーソナリティ」という問題設定は、心理的次元を含んだ「全人間

的」な精神のはたらきに迫るためのひとつの発想であり、方法だった。そして「今の日本での社会心理学的な仕事として良いことをやっている人」として、日高は社会（心理）学者・清水幾太郎と政治学者・丸山眞男を挙げ、「丸山眞男氏の政治学的な分析、あの中に実は僕らが求めたい最も社会心理学的な方法があると思うんですよ。丸山氏はもちろん意識して心理学的な方法としてやっているわけじゃないんだけどね。日本の現実と対決している中で、おのずから出て来たわけなんですね」と述べる³⁷⁾。

さらに日高はこの座談会で、アメリカにおいて心理学が軍事科学と結びついてきた事実を論じる。心理学の負の側面を深く知悉しつつ、それでもなお20世紀後半において心理学と医学や社会学との提携を追求することの不可避性と可能性とを見据える日高の姿勢は、戦後知識人のなかで、独自の位置を占めていた³⁸⁾。

こうした日高の問題関心は、社会心理学という学問が、そもそも社会現象と個人心理のダイナミックな相互規定性を追究しようという志を抱いて出発したことと対応している。社会心理学が心理学のなかの一領域に回収されていったのは1960-70年代にかけてのことであり、研究の細分化と棲み分けもそれに伴って進行した。初発の問題関心の喪失を今日鋭く批判する社会心理学者・小坂井敏晶は、次のように述べる。当初「社会心理学という学問は字義通り、社会と心理、つまり集団現象と個人現象との関係を考察する目的で提唱され」、「社会学と心理学の分裂状態を止揚するはず」だった。しかし1960年代頃からしだいに理科系の学問としての性格を強くし、マルクス・デュルケム・ヴェーバーなどの理論は放棄されて「細切れの小理論ばかりが提唱されるように」なり、「社会・文化・歴史と独立に人間の普遍的な心理過程がまずあり、社会状況に置かれると人間の行動はどう変化するのかという発想が取られるように」なってしまった³⁹⁾。

また社会心理学の展開を「思想史」として論じた社会心理学者・橋本仁司は、ヨーロッパの社会心理学史を紐ときながら、社会現象を問うてきた社会心理学がいかにして個人主義の国アメリカで個人心理学の一分枝となり、「個人の観点を主張するために社会の観点を抹殺」したかを詳らかにしている。そしてそのようなアメリカ社会心理学の実証主義に追随し「社会風土の相違について感受性ゼロの強行策を取り続け」る「わが国の社会心理学者たち」を、橋本は「親方日の丸、いや親方星条旗といった気分」なのであるうかと、皮肉を込めて批判している⁴⁰⁾。

他方、社会学の分野でも著しい細分化が進み、概して日本の社会学は今日、自己の来歴にあまり高い関心をはらわない⁴¹⁾。こうした、「社会心理学」の消滅と社会学・心理学研究双方の分業化は、日高六郎という存在が顧みられない現在の学問・思想状況と密接

である。加えて思想史研究の視点からも、戦後啓蒙のなかの「社会心理学」は死角になっている。しかし、そもそも啓蒙ということを実に志すのであれば、自覚的・体系的な理論や思想をもたない人々の心理を知り、人々の心理に食い込んでいくことは不可欠だったはずである。イデオロギーや思想に興味をもつ者が、傾向として心理的な側面にはあまり関心を示さないという「イデオロギーとパーソナリティ」の相関関係は、こうした研究状況を鑑みても、基本的に現在まで継続しているのではないか。

2.2 戦後社会への洞察

1950年代とは、日本社会の「二重構造」——知識人と「民衆」、都市と農村、近代と前近代、等——が可視化された時代だった。労働争議が大規模に展開され、反基地闘争や原水禁運動がおこり、教育運動や母親運動が広がった。知識人の社会的発言や活動が広範に展開され、同時に全国各地で、草の根のサークル・生活記録運動が叢生した。日高は東大新聞研を拠点に社会調査を行うほか、鶴見和子ら思想の科学研究会のメンバーとともに、そうした運動に積極的に関わっていった。

総評が指名解雇反対闘争を指導した1954年における日鋼室蘭闘争では、日高は「ぐるみ闘争」の担い手である労働者・主婦・子どもたちによるまとまった量の手紙を読む機会を得た。そしてそのなかに「文学の根源的なエネルギーとなるようなもの」を感じ取る一方で、手紙の表現や内容が戦時下のそれときわめて似通っていることを指摘する（たとえば、「勝つ日まで、ぼくたちはなにもほしがりません」等）。その上で、次のように述べる。

古い伝統意識を克服していく力となるのは、決して「近代的自我の自覚」や「実存主義的決断」や「家からの脱出」などではなくて、さしあたっては、「同じ仲間への義理」や「浪花節的情緒」や「家族ぐるみ」の結合であり、〔…〕「団結」の思想とかたく結びついていたように想像されます。そして、結局はそのような外見的な古めかしさが、新しいたたかひのささえとなることで、その古めかしさ自体もさらに克服されて、真実の新しさへ成長するという「弁証法的な過程」がくりかえされたのではないのでしょうか。

そして日高はこの過程をつかみ出すことが「成長する魂の弁証法」を成立させるために必要だと述べている⁴²⁾。こうした姿勢は、道徳教育をめぐる次のような議論に接続す

る。「近代的自我の確立は、われわれのばあい、ヨーロッパ的なルネッサンスや宗教改革などの通路によってではなく、別の通路、すなわち平等の仲間たちの団結と友情という通路によって、はじめて可能となることを忘れてはならない。このことをはっきりと認めることこそ、現代社会のなかで新しいモラルを確立するための第一歩とならなければならない」⁴³⁾。

こうした啓蒙観は、日高がマス・コミュニケーション研究に取りくんだ動機的一端を説明するものでもある。「近代的自我の確立」に至る通路はさしあたり「団結と友情」だが、それは日本の社会意識に顕著な「他人のまえで面目を失すること面子をきずつけることを、極端におそれる」態度や、少数意見の表明が敵意の表現と受け取られる現状を打破し、「だれでもが発言できるふんいき」を創出する足場となる可能性がそこにあるからである。社会調査の成果をふまえ、日高は日常におけるコミュニケーションを①パーソナル・コミュニケーション、②マス・コミュニケーション、③その中間の、特殊な問題を中心とするコミュニケーションの3つに分類し、③（たとえば、学校の職員会議など）において「重苦しい「一同沈黙」が起こる要因は、無智・虚栄心・保身の態度にあると分析し、ホルクハイマーにも依拠しつつ、③が弱まれば「ばらばらの孤立した個人」が独裁政治の「心理的な準備を完了してしま」うとする。そして「直接的面接的なコミュニケーションで説得された意見、あるいは討議の結果えられた結論は、マス・コミュニケーションによってふきこまれた意見よりも、かえって、心の奥深いところにまでくこむことができる […]「だれでもが発言できるふんいき」はファシズムに抵抗するための一つの条件である」と主張する⁴⁴⁾。こうした観点から、「人間が機械化されないためには、小さなグループやサークル活動が一番重要」⁴⁵⁾だと、サークル運動に期待を寄せていく。

しかし「古い人間関係」を打ち破ろうと現場に入っていく具体的な局面において、運動の当事者が直面する困難や不利益についても、日高は注意を促している。大学生による帰郷運動では、地域に入っていった学生たちの話を聞きながら、「現在私にとっていちばん気になっているのは、運動に参加することによっておこる家庭的なトラブルや、将来の就職への影響や、あるいは直接露骨な干渉にどう対処すべきかということだ」と述べ、学生の「自己防衛の運動は、けっして学生のエゴイズムでもなんでもない」とする⁴⁶⁾。「前近代的」で“半封建的”な実社会をひとまず明日も生き延びなければならない学生に対して日高は、たとえば就職試験の口頭試問で女子学生が「あなた、お茶をくみますか」と聞かれたとき「いや、私はお茶くみはしません」と返答することを「あらゆる人に要

求するのは、やはり過酷」だと述べる⁴⁷⁾。自立した強い主体を希求した戦後啓蒙期「近代主義」の知識人のなかにあつて、現実の主体に対する日高の柔らかいまなごしは、固有であった。

そして小集団のコミュニケーションに期待を寄せる一方で、日高は人間関係をめぐる心理学の学知が管理社会のツールとして用いられることの危険について、1950年代から警鐘を鳴らしていた。企業の労務管理にヒューマン・リレーションズが適用され、露骨な管理抑圧体制がしだいにソフトで洗練された統制へと切り替えられてゆく状況について、日高は次のように述べる。「労働者の心理的な不満までもひっくめて、心理的な側面全体が搾取されていく。気付かないでいる間に搾取されていくことになる。人間の心理自体までマニピュレート（操作）してしまうことになる。小集団の関係を調整することで、ますます大きな機構を安定させていくという問題になる」⁴⁸⁾。高度産業社会において、(社会)心理学者がテクノクラートとして機能し、心理学の学知が人間疎外を引き起こす規律権力として作用することの危険に早くから着目していた日高は、高度経済成長期に入る1950年代後半には、「現在、人間疎外は、封建的なものをふくみながら、いわゆる「大衆社会」状況とのからみあいでの問題になる。そのところを明らかにしなくてはならない」と述べ⁴⁹⁾、「大衆社会」状況への洞察を深めていく。

60年安保闘争においても日高は積極的に発言し、改訂安保条約成立後に共同執筆した岩波新書『1960年5月19日』のなかでは、運動の問題点の多くを剔出している。とくに「動いたものと動かなかったものとのあいだ」という問題設定を行い、「動いたものにある程度共感しながら、しかし自身は動かず、また動けなかった多数」の内実を次のように分析する。

動いたものが意識水準が高く、動かなかったものがおくられているという尺度だけでははかれない。比較的自由に発言できる大学教師がそうでない小学校教師よりも勇気があるわけではなく、ピケをはったあとすぐヒル寝ができる学生が、すぐ職場にかえらなければならない労働者よりもつねに進歩的であるはずはなく、大都市の駅頭でピラをくばる青年が、一枚のポスターを故郷の村の掲示板にはることができるかどうかは保証のかぎりではない。[...] 第二に、そのことと結びついて、比較的気軽に動くことのできる層が、学者、文化人、学生、組織労働者、生活の安定した主婦層等であり、小市民層（いわゆる中間層）的な大きな部分をふくんでいることから、運動を支配する空気がどうしても小市民的となりやすいという欠陥があった。

[...] そうした空気は、もっと社会の底辺に近い部分、すなわち未組織労働者、半失業者、失業者、農民の下層の部分、漁民（あの米騒動の主役たち！）等を支配している生活気分とは必ずしも調和しない。運動のスタイルはより多様であってよく、その意味でいわゆる日本経済の二重構造のなかの下層に位置する労働者的な、あるいは失業者的な、あるいは農民・漁民的な風貌や言葉や要求がもっと登場してよかった。名実ともに諸階層の多様性があらわれることが望ましかったのだ。[...] そして第三には、動かなかったものが、動いたものへ近よろうとしながら、再びそこから遠ざかっていくひとつの理由として、運動のスタイルが、多様な集団の連帯の表現というより、紋切型の画一主義に傾いていくことにたいする反発もある。[...] 運動のがわにも、依然として、機械的にくりかえされるスローガン主義やぎこちない形式主義が残っていた。⁵⁰⁾

ここでも日高にあって重要なのは運動の担い手やスタイルの多様性であり、「紋切型の画一主義」・「スローガン主義」・「形式主義」は批判の対象である。学者・文化人・学生などがその社会的特権によって行動し得たことを意識水準の高さとみなすことは不正だという主張には、現実のなかの個々人を社会構造のなかで捉えるまなざしが一貫している。

このような日高の「社会心理学」のパースペクティブは、巨視的に見れば、西欧マルクス主義の流れのなかに位置づけることが可能だろう。フロムに惹かれたのも先述のとおり、下部構造と上部構造のダイナミックな相互規定性に着目する発想そのものにあつた。そして構造と主体の弁証法を追究しつつ、主体の意識変革によるヘゲモニー確立に向けてはたらきかける日高の「近代主義」の立場はまた、大衆社会化がはじまる1920-30年代の日本で芽ばえた文化社会学の系譜を引くものでもあつた⁵¹⁾。それは西欧——ドイツのフランクフルト学派のみならず、イギリスのカルチュラル・スタディーズとも親和性の高いパースペクティブである。サークル運動がパーソナル・コミュニケーションの回路を創出することによって「近代的自我の確立」の拠点となることへの期待は、現在では「コミュニケーションの理性」と呼ぶこともできるだろう。そういう意味で日高は「近代主義」だが、しかし日本には日本独自の社会主義への道のりがあるという発想において西欧中心主義を相対化している側面がある。下部構造と上部構造の相互規定性への日高の関心は、「科学」によって歴史の発展法則を正しく掴んだ前衛が遅れた大衆を指導するという思考を退け、「大衆の中の悪いものも容赦なく指摘」しながらも、自立的な責

任主体たりえない人々に同伴し粘り強くはたらきかける相互的な姿勢をもたらした。日高にあって「民衆」とは単にイノセントな被抑圧者ではなく、またそれゆえ単に可能性を秘めた変革主体でもなく、また単に近代市民社会が要請する主権者たりえない「封建遺制」の体現者でもなく、また単に総力戦を草の根で担った侵略戦争の加害者でもなかった⁵²⁾。

このような主体観は、現在であれば、agent または agency という言葉によって表されるものである。青年期の日高がクロボトキンに影響を受けたことは先述したが、そのクロボトキンは、帝政末期ロシアのツァーリズムがそのヒエラルキーの底辺であえぐ農奴のみならず、頂点に君臨する皇帝をさえ人間疎外していることへの、静かな洞察を有していた。その抑圧者に対するヒューマニズムもまた、構造化された主体への日高のまなざしに、何ほどこ影響を与えていたのかもしれない。

こうした視座は1960年代以降、高度経済成長のなかで快適さを享受し「滅公奉私」に走る人々が、「管理主義的全体主義へのなだらかな道を歩いているのかもしれない」という洞察につながる⁵³⁾。大衆消費社会とそこに生きる人間心理へのまなざしを有していたことが、知識人のプレゼンスが後退する高度成長期以降も、日高が息の長い活動を展開し得た理由のひとつだったのではないか。個の自立、強い主体を希求した丸山政治学や大塚経済学・史学に代表される潮流とも、また弁証法なき既成左翼とも異なる、あらかじめ社会化・構造化された主体への視座をもつ戦中派知識人が、日高であった。日高の個へのまなざしは、思想的である。相手がマルクスやフロムであれ市井の人であれ、その人の理論や発言や行動が立ち上がってくる過程をあくまでコンテクストのなかで動的に掴む人間観が、日高を貫いていた。

3 教育への関わり

3.1 社会科教科書執筆と教科書ページ

いまではあまり知られていないが、日高は敗戦直後から学校教育に関わっていた。いくつかの偶然から教育にコミットした経験は、日高が「行動する知識人」となっていく重要な契機であったように考えられる⁵⁴⁾。日高が教育をきわめて重要視した理由のひとつを端的に述べるならば、それは教育こそが、人々のコミュニケーションのあり方や「社会的性格」を変革していく可能性をもつ営為だからである。

戦後教育改革により新科目「社会科」が成立したとき、初の教科書執筆を、当時文部

省職員だった教育学者・勝田守一が日高に依頼した。文部省著作（最後の国定教科書）の新制中学社会科教科書 18 分冊のうち最後の 1 冊『個人と集団生活』（1948・1949 年）を、日高が書いている。後の日高は当時について、「私はまだ助手であり、三〇歳まえの青二才であった。いまの文部省的感觉からは想像もできないようなことだろう。敗戦直後には、すべてが流動的だった」と振り返る⁵⁵⁾。

依頼を受けて日高が執筆した教科書は、戦争による犠牲を集約的に受けて育った子どもたちに対し、その自然な欲求をまずは肯定するものだった。人間がもつ肉体的・社会的・文化的要求について詳述し、「人間はこのような要求を持っているおかげですぐれた仕事を残した」と述べる文章には、ルネサンスとも言うべき人間肯定の思想が貫かれている。そして基本的人権を認めるとはそうした人間の「根本的な要求」を「人間の権利として認めること」であるとし、「基本的人権を尊重する社会は最も永続性があり、また最も安定的である」と述べる。さらに「社会はだれのための社会なのだろうか」という問いを立て、

大多数の国民のためにもならず、また国民の子孫のためにもならなくて、しかも国のためになるというような規則があるだろうか。独裁的な権力を持つものはすぐに「集団のために」といいががる。しかし家庭の父や母や子をのぞいてどこに家族があるだろうか。先生と生徒とをのぞいてどこに学校があるだろうか。もちろん、人類のため、国のため、社会のために自分の利害をすてて行動しなければならないこともある。しかしその犠牲的行為がこの上なく貴いのは、それが人類ひとりひとりのために、国民ひとりひとりのためになる行為であるからである。⁵⁶⁾

と書いている。この記述は、日高自身の思想と行動の原理を述べたものとしても読める。

この教科書執筆に次いで日高は、文部省学習指導要領の改訂メンバーに入り、1951 年度（試案、中等社会科）と 1956 年度（高等学校社会科社会）の改訂を担った。そして 1951 年からは順次、中学 3 年生・高校生・小学 6 年生向けの検定社会科教科書の執筆を、中教出版を版元にはじめる（すべて共著）。日高と組んで執筆を担った共著者のひとり、経済学者で後に神奈川県知事となる長洲一二であった。小 6 対象の教科書『あかるい社会』（改訂版、1953 年）の内容は、たとえば「報道機関のはたらき」という項目に 30 ページあまりが割かれ、新聞・ラジオ・ニュース映画の仕組みと歴史を解説するとともに「言論の自由」について考えさせるなど、マス・コミュニケーション研究にとりくむ日高な

らでは、現在ではメディア・リテラシーと呼べる内容が重視されている。

そしてこれらの教科書が、1955年の鳩山内閣によるパンフレット『うれうべき教科書の問題』と、翌1956年の文部省による「F項ページ」の標的となる（「第一次教科書排撃」）。日高と長洲は、教科書が1956年3月に検定不合格とされた後に中教出版に及んだ政治的圧力を知り、書き換え要求に応じることはできないと交渉を重ねるが、9月に筆を折ることを決め、事態を世に公表する。日高・長洲の連名で出された「声明・『日本の社会』執筆辞退について」は、ページの経緯を示し次のように述べる。「(一)教育に対する政治の圧力の一つのあらわれとして、(二)現場教師の人たち、ひいては子どもたち、父母たち、ことにいままで私たちの編集した教科書を使ってくださった人々に対する社会的責任として、さらに、(三)とくに私たちとしては、学者、教育者の学問・思想の自由の問題として真剣に考えたいと思います」⁵⁷⁾。そして地域の人々と教科書を読みあって意見交換を行うなど母親運動とも結びつきながら、『「あかるい社会」とはどんな教科書か——民主党の「うれうべき教科書の問題」に答えて』（中教出版、1955年）という本を出すなど、問題の理解と議論を広げる活動を行う。

日高・長洲声明は大きな波紋を呼んだ。日本教職員組合（日教組）や各都道府県教職員組合もこの問題を盛んに取り上げ、政府・文部省による一連の文教政策への反対運動は、やがて1950年代末にかけて、道徳教育特設と教員の勤務評定（勤評）反対闘争の高揚に接続していく。

3.2 文教政策への対峙

教科書ページをはじめとする一連の政府・自民党による文教政策は、戦後教育改革の急進性に対する人々の水面下の不信や反感をその支持母胎にしていたとも言えるものであり、そして日高が精力を注いだのは、そのような心理的基盤を革新勢力の側に引き入れることだった。文教政策の「逆コース」がはじまる前夜、すでに日高は教育基本法があまりに現実ばなれした理想的な文言で満たされていることへの違和を述べ、「美辞麗句」と「暗い現実」とを結びつけることを、だれが、どのように実践するか」を問うていた。そこで日高が強調するのは、「固定的な、完成してしまつた人格」を想像することではなく、「暗い現実からの解放——教師の、子どもたちの、日本人全体の——という努力の過程のなかで、はじめて人格は完成し、個人の価値は守られ、自主的精神は養われる」ということだった⁵⁸⁾。

文教政策が保革対立の焦点となりつつあった1955年には、日高は日教組が毎年開催す

る教育研究全国集会（教研集会）で依頼を受けて講師を務め、それ以来、教研活動に深く関わるようになる。当時日教組に同伴する知識人は多かったが、日高はその中心的存在であった。後に日高は教研集会についての解説文で、「ひとりびとりの子どもたちに重くのしかかっている、それぞれの出身階層や貧富の差や家庭・地域環境などの問題がある。被差別部落や在日朝鮮人の子どもたちの苦しみもある。基地の子たち、とくに沖縄の子どもたちの問題もある。それらの問題を、ほんとうに生きた子どもたちの姿を通して、語りあう場所が教研活動であり、教研集会なのだ」と書いている⁵⁹⁾。

教研への介入を含む、日高の教育における啓蒙の特質を端的に述べるならば、それは当時地域における知識人とも呼べる社会的位置にあった学校教員——彼らは「工作者」（谷川雁）となる可能性を孕んでいる——の知的認識にはたらきかけ、人的ネットワークを創出し、コミュニケーションの回路を開いていくことを核としていた。そしてそのことを、日高は「逆コース」の攻勢に対峙する過程のなかで実現しようと試みた。

まさに社会意識と密接な道徳教育問題についても、日高はそうした啓蒙を実践する。教員同士、あるいは教員と保護者と地域の人々とが道徳教育について率直に議論するよう呼びかけながら、「知的認識と結びついた道徳」を実現すべきことを随所で論じている。「いままでの徳目主義という正直とか忍耐とかいう形のもの、知的認識と切り離されて」いたが、そもそも「親に同情するとか、親を尊敬するとかいうことは、ある意味では子供の知的な認識と結びついている」⁶⁰⁾。したがって「お説教をするのではなく、現実には伸びている新しいモラルに目をつけて、それをおしすすめていく、そういうところへ道徳教育は持っていかなければ」ならず、また革新の立場にたつ「教師のほうでも、〔子どもに〕なまのイデオロギーのおしつけをするのはまちがい」だと主張する⁶¹⁾。

勤評問題は1958-59年にかけて教組による反対闘争がピークを迎え、政府の切り崩しにあって収束していくが⁶²⁾、日高は教員に向けて、言論による批判的介入を頻繁に行った。運動の激化とともに教員間に分断が生じ世論の支持が離れてゆく情勢のなかで、日高は「真先に〔勤評問題を〕理解してくれるはずの賃金労働者、俸給生活者が、現実にはみなきびしい「勤務評定」を職場でうけていること、そこで教師だけが例外でなくてもよいだろうという感情」が教師の周囲に渦巻いていることを指摘し、「日本の教師が、もし真剣に勤務評定について「全労働者とともに」団結して闘争をすすめていくほどの覚悟があるのならば、いま日本の「全労働者」がどのような労務管理、どのような「勤務評定」の実態のなかにおかれているか、まじめに考え研究する必要があるのではないか」と述べる。また運動に参加する「個々人の自発性の強度をつねに考えることが必要」だと主

張し⁶³⁾、運動の表面上の先鋭化と日教組の「官僚主義的画一主義」に対する踏み込んだ批判を展開する。作田啓一は先述の論考で日高を「媒介者」と呼んだが、その媒介とは、現実を構成するあらゆる主体に対し具体的批判を投げかけ知的認識を触発する、ラディカルな媒介であった。

教育にコミットした動機とそのことが日高自身にもたらした意味について、日高は東大新聞研を辞した後に、次のように述べている。

こうした私の選択は、私にとってかならずしも全面的にプラスだけであったとは思わない。私の時間とエネルギーを、もっと別の仕事に向けるべきだと忠告されたこともある。しかし、私が教育研究活動のなかで考えたこと、学んだことが大きかったことは否定できない。[……] 思いがけないほどに早く戦後の反動ははじまり、戦中派の私は、それをそのままに見すごすことはできないと真剣に考えた。私の教育研究活動への参加のいちばん決定的な動機は、単純ではあるけれども、その点にあったと思う。⁶⁴⁾

確かめようもないことだが、仮に教育に踏みこむことがなければ、あるいは日高はまともな社会（心理）学の学術成果を残していたのかもしれない。しかし敗戦後の流動的な状況のなかで日高がその都度選んだのは、研究者として評価されるよりも、現実を生きる主体の意識変革に向けてはたらきかけるアンガージュマンだった。

3.3 学問と教育、「東大紛争」

日高は1950-60年代にかけて、自身が編者・編著者として携わった社会学関連の多くの叢書において、教育に関する論考を組み込み、学問と教育とを結びつけようと試みた。また日教組の運動への介入と並行して、教育の法的・制度的問題にも注意を促した。1956年3月、東大総長・矢内原忠雄らによって教育の国家統制を批判する「文教政策の傾向に関する声明」が出されると、日高は、

教科書法や教育委員会法の改悪が「学問・思想の自由」をおびやかす危険があるということは、案外学者や研究者のあいだでさえ気づかれていないのではないだろうか。これらの文教二法は[……] 主として小中学校の問題で、大学で研究に従事しているものにはあまり関係がないと考えるような空気が、ないでもないように思われ

る。〔…〕それは自分の足もとに掘られているおとし穴に気づかないでいるのと同じように危険なことであろう。〔…〕大学で研究に従っている私たちは、矢内原総長の声明にたいして、いちじるしく立ちおけているのではないかとさえ思われてならない。⁶⁵⁾

と呼応し、初等・中等教育と高等教育とを別物とみなす多くの大学教員の認識に対する問題提起を繰り返す。日高が重視する初等・中等教育と高等教育の関係性は、1965年から展開される家永教科書裁判において、原告側と国側の主要な対立点のひとつとなる論点でもあった⁶⁶⁾。

このような日高の教育をめぐる継続した問題意識は、1968年前後を考えるための手がかりでもある。「東大紛争」が収束していく1969年、日高は東大教授を辞する。全共闘が突きつけた問いのひとつは、大学という場が、体制に奉仕する人材供給のシステムに墮しているという問題だった。日高が敗戦直後から粘り強く展開した教育論は、東大を離れた彼の判断と不可分である。辞職後の日高は次のように書いている。

私は、所属していた東大新聞研究所の週一回の所員会で、〔教研〕全国集会に参加したあと、何回か研究報告として、教育研究活動のコミュニケーション論や組織論や意味論を話したことがある。アカデミックな研究会の空気には、日本の小・中・高の教師のなまな実践の記録は、なじみにくい感じがある。それは宙に浮いてみえる。しかし、ほんとうに宙に浮いているのはだれなのか。私は、研究と教育とを結びつけようとし、またそのための組織づくりをしようとして悪戦苦闘している日本の小・中・高の教師の報告書を、研究所の所員会のテーブルの上に散乱させた。それは同じ教師の一つの義務であると考えたのだった。〔…〕〔東大「紛争」についての〕私の考えの一つは、日本の教師のなかで、大学教師がいちばんおけていたということにつきる。私は、人間的傲慢が、無意識的にでも大学教師にあり、いまでもそれがあると思う。そして、それこそが東大「紛争」のかくれた原因だったと思う。⁶⁷⁾

日高は晩年には、次のように述べている。「戦争が終わっても変わらなかったのは、お相撲と東大だ」⁶⁸⁾。アカデミズムへの批判は、戦時下にすでに峻烈だったとはいえ、戦後それは、むしろ深まっていったように思われる。そのことは次の文章からも察せられる。

混沌から分析・抽出する作業がどのように見事であっても、ときにはその成果をもう一度混沌へもどしてみる必要がある。私の経験では、確実な真理はおおむね索漠としており、おもしろい話はいかに不確実な議論にしかすぎない、ということが現在の社会科学の一般法則に近い。そして、自称アカデミシャンには、真理に忠実であるふりをして、索漠とした〈真理〉を壮重に表現する技術者が多いのである。〔…〕不確実な認識が確実なそれよりも、学問というものさしではかつてみて、より貴重だという例はいくらでもある。確実な認識だけをめざすものがいてもよいが、不確実であっても、また、別の意味をもつ仮説をたてる冒険者がむしろたいせつである。日本のアカデミズムのなかではとくにそうである。⁶⁹⁾

晩年の日高自身の「僕は絶対に学者じゃない」という語りは、あくまでも東大新聞時代の日高が残した、膨大な学術成果の内容とともに理解されなくてはならない⁷⁰⁾。そして学者としての日高が、アカデミズムの何に絶望してきたのかということは、おそらく彼の教育論・教育観と不可分である。

おわりに

「市民運動の旗手」「近代主義者」とされた日高は、「市民」や「近代」の実現を追求しながら、同時に「市民」からはみ出す存在や、近代が人間を疎外していく現実へのまなざしを有していた。そして、「市民」の価値しか捉え得ない「進歩派」の認識を問うた。これまで日高に貼られてきたラベルにはとうてい納まりきらない、残余こそが日高の独自性であり、核だろう。そして戦後知識人研究は、そうした残余をこれまで十分に論じてこなかった。「戦後民主主義」研究は今もなお、その代表的存在についての詳細な検討を欠いたままである。

日高のもつすぐれて独自の才能とは、ひとつには、刻々と動いていく現実への細やかな洞察力と発信力であり、またひとつには、さまざまな問題に関わり続ける、並外れた忍耐力と持久力であろう。言語論的転回とか「ポストモダン」思想をもち出すまでもなく、出来事に対する「正しい」洞察や意味づけが、この世に存在するわけではない。しかしそのことは、どのような洞察や意味づけも単に相対的であることを意味しない。状況に絶えず自らを投企しながら日高が描いてきた同時代史が、これまで多くの人に受け入れられてきたことそれ自体が、総体として、戦後思想史である。

具体的状況を調査し整理・腑分けするという点では、日高の書いてきたものは、社会学そのものと言える。しかし「その成果をもう一度混沌へもどしてみる」試みを、歴史性のなかで遂行する実践こそ、日高に固有の創造だった。そうした意味で日高は、社会学からはみ出す存在であった／あるいは、すぐれた社会学者であった。晩年の日高は、「クリティックが、学問の本質だと思う」と述べている⁷¹⁾。

「理想主義」と「現実主義」がとかく背反関係と捉えられがちな戦後日本の知的風土のなかにあって、現実を見据えた日高の粘り強い理想の追求は、稀有のものだった。そのアクチュアリティとラディカリズムの結合は、「社会心理学」に裏打ちされていた。日高とともに教科書ページに対峙した長洲一二は、日高について、「ちょっと見は女性的とも言える彼が、その時々の大問題に、憑かれたようにぶつかっていくすさまじい気迫の正体」が容易にはわからないとしながら、次のように述べる。「彼を「円満な統一論者」とか「体系的でない」とか評する人がいるという。読みが浅いか、思想の手持品主義にアグラをかいている怠け者であるかの証拠だろう。そんな人には「思想の純血性よりは混血性」に期待する彼の姿は見えない。「異質なものととの衝突」にどん欲に立ち向かっていく、冒険家日高が見えない⁷²⁾。「体系的」に武装した学術成果をものさなかつた、「含羞の知識人⁷³⁾」をいかに評価するか、そこで試されるのは、長洲が示唆する通り、むしろ読み手の側であるだろう。

日高は繰り返し、次のように述べている。「正義という大義名分が、じつはそれが不正であったときはおそろしい。それがまさしく正義であっても、なおやさしさが必要である。もちろんやさしさだけでも、自他を不幸にみちびく。やさしさとは、おそらく人間が有限の存在でしかないということの認識である⁷⁴⁾。平易な文体で日高が述べる「やさしさ」とは、つまりは「大きな物語」全盛がやがて内ゲバへと至る時代の、懐疑と留保の思想である。「人間解放」を志した日高は決して虚無主義ではなかったが、しかし日高が発信し続けたのは、「進歩派」の楽観的観測ではなく、人間の有限性の自覚だった。

敗戦直後、絶望と安易とが背中合わせであることを鋭く告発した日高は、高度経済成長が「正しさ」も「かしこさ」もすっかり前時代のものにしてしまったとき、水俣から次のように問うた。「問題は、絶望と希望とのあいだに立って、私たちはいったい何ができるか、ということではないでしょうか⁷⁵⁾。絶望と希望とのあいだに立って日高がいったい何をなしてきたのかを、歴史性のなかで知っていくことで、これまでの戦後思想史に、新たな視野がもたらされるかもしれない。それはまた同時に、彼がアカデミズムに深く根ざしながらやがて遠ざかっていったことの意味を、いまアカデミズムが、どう受

けとめ得るのか考えることを要請するだろう。

*本稿は JSPS 科研費（特別研究員奨励費・課題番号 18J12625）による成果の一部である。

注

- 1) 順に、『毎日新聞』2018年6月7日夕刊1面、『朝日新聞』2018年6月7日夕刊1面、『読売新聞』2018年6月7日夕刊10面、『東京新聞』2018年6月8日朝刊26面、『京都新聞』2018年6月8日朝刊26面。
- 2) 代表的なものとして、日高六郎「解説 戦後の「近代主義」」（同編『現代日本思想体系34 近代主義』筑摩書房、1964年）、日高六郎「解説 戦後思想の出發」（同編『戦後日本思想体系1 戦後思想の出發』筑摩書房、1968年）。またリアルタイムでの時事的発言が引用されることも多い。
- 3) 近年の日高研究としては唯一、北河賢三「日高六郎の戦争・戦後体験と戦後思想」（『早稲田大学教育・総合科学学術院 学術研究（人文科学・社会科学編）』66、2018年3月）が挙げられる。北河は、日本の戦後思想のなかで日高が60年以上にわたって果たしてきた役割と思想の特質を見通したこの論考において、戦後史・戦後思想史を考える上で日高の思想と行動を検討することは不可欠だと主張し、それがほとんどなされない研究状況に対して、「すっかり“時代が変わった”といわれてから久しい、昨今の「学問」と「思想」への関心のありようを象徴しているように思われる」と述べている（135頁）。
- 4) 宇野重規「〈解説〉民主主義と市民社会の模索」（同編『リーディングス戦後日本の思想水脈3 民主主義と市民社会』岩波書店、2016年）300頁。
- 5) 杉山光信「解説」（同編『日高六郎セレクション』岩波現代文庫、2011年）346頁。もっともここで杉山は、院生時代に教員としての日高をそのように感じたことを振り返り、「考えてみれば平和運動にしても市民運動にしても、運動というものは異なる考え・立場・体験をもつ人びとによって進められるものであり、異なる考え・立場・体験を相互に理解したうえで接点を見つけ出す、協調し目的に向かって一歩でも前に進むという行き方こそ、日高さんという存在の重要な意味であり存在理由であったのだから、まだるっこしいなどといっけなかつたのだ」とつけ加えている。このような日高への穏当な評価は現在も一般的だが、それが妥当なのかについても、本稿で検討したい。
- 6) 「社会心理学」とカギカッコつきで表記する理由については第2章で詳述するが、端的に述べれば、心理学のディシプリンの中の一領域となった現在の社会心理学（心理学的社会心理学）とは、随分異質なものであることに留意するためである。
- 7) 前掲北河「日高六郎の戦争・戦後体験と戦後思想」135頁。
- 8) 引用文中、〔 〕内は引用者による補足を示す。また旧漢字は新漢字に改め、旧かなづかいは現代かなづかいに改めた。傍点はすべて原文ママ。
- 9) 日高六郎『戦争のなかで考えたこと——ある家族の物語』（筑摩書房、2005年）53頁。

- 10) 前掲日高『戦争のなかで考えたこと』218頁。
- 11) 日高六郎「入門以前ということについて」(同『日高六郎教育論集』一ツ橋書房, 1970年, 初出1970年) 379頁。
- 12) 前掲日高『戦争のなかで考えたこと』64頁。
- 13) 「国策転換に関する所見」は, 前掲日高『戦争のなかで考えたこと』に全文が掲載されている。この所見について朝鮮近代史研究者の水野直樹は, 戦時下でこれほど明確に植民地解放を主張した文章は他に類を見ないものであり, これを政治思想史のなかにきちんと位置づける必要があると述べている(2018年9月22日「日高六郎を語る会」(於京都大学楽友会館)のシンポジウムにおける壇上での発言)。
- 14) 日高六郎「集団の封鎖性と開放性について」(『社会学研究』1944年6月) 274頁。
- 15) 作田啓一「日高六郎論」(同『恥の文化再考』筑摩書房, 1967年, 初出1965年) 236頁。
- 16) 日高六郎「船上の記憶など」(前掲『日高六郎セレクション』, 初出1951年) 7-8頁。
- 17) 日高六郎『戦後思想を考える』(岩波新書, 1980年) 62頁。
- 18) 日高六郎「私たちに問いかけるもの」(東大共同組合出版部編『わたつみのこえに答える——日本の良心』東大共同組合出版部, 1950年) 128-132頁。
- 19) 日高六郎「大知識人論」(前掲『日高六郎セレクション』, 初出1947年) 281頁。
- 20) 前掲日高「大知識人論」279-288頁。本多秋五は『近代文学』に掲載された日高のこの論考について, 「『近代文学』の最大公約数をこえた個性的なひびきがある」と評している(本多秋五『物語 戦後文学史(上)』岩波現代文庫, 2005年, 初出1966年, 224頁)。
- 21) 日高六郎「ベルグソンとデモクラシーの心理学」(同『現代イデオロギー』勁草書房, 1960年, 初出1946年) 448-462頁。
- 22) 日高六郎「あとがき」(前掲日高『現代イデオロギー』) 584-585頁。
- 23) 日高六郎「『現代の理論』処分によせて」(前掲日高『現代イデオロギー』, 初出1959年) 221-225頁。
- 24) 日高六郎・長洲一二・沖浦和光「現代を生きる思想の課題——構造改革論の思想的反省——」(『現代の理論』4(3), 1967年3月) 13-14頁。
- 25) 日高六郎「市民と市民運動」(前掲『日高六郎セレクション』, 初出1973年) 248頁。
- 26) 近年の知識人研究あるいは「知識人と民衆」の断絶の問題に取りくむ1950年代研究の少なからずが, 社会階層や身分としての知識人ということと資質あるいは当為の問題としての知識人ということを混同し, 議論が錯綜しているように思われる。日高は社会階層としての知識人の特権性を突き崩すことに尽力し, 同時に当為の問題として自らは知識人であろうとした人物だった。こうした先行研究の問題点については, いずれ稿を改めて論じたい。
- 27) 日高六郎「二つの世界」(『総合文化』2(5), 1948年5月) 42-43頁。
- 28) 日高六郎「日本の教育と知識人——ジャンセン教授の論文について——」(『世界』142, 1957年10月) 170頁。
- 29) 日高六郎・埴谷雄高「知識人と大衆 “両者の断絶” 考え直せ 限界にきた上からの指導」(『朝日新聞』1958年11月29日朝刊) 6面。

- 30) 前掲作田「日高六郎論」240-242頁。作田はこの論考で日高について、「時事的発言がそのまま彼の社会学の仕事となっている」と評し(248頁)、その学問・思想・行動の有機的連関をもっとも原理的に解き明かしている。その作田自身は晩年、「社会学専攻の学生であった私は日高六郎の「ベルグソンとデモクラシーの心理学」などの初期の論考を読み、この線なら私も社会学を続けてゆけろと思った。その意味で彼は私の導きの星であった」と述べている(「二〇一二年読書アンケート」『みすず』612, 2013年1・2月, 98頁)。
- 31) 前掲日高「あとがき」(前掲日高『現代イデオロギー』)584頁。
- 32) 日高六郎・清水幾太郎「書評 ファッシズムの心理——E. フロム『自由からの逃走』——」(『世界』75, 1952年3月)126-127頁。
- 33) 日高六郎「訳者あとがき」(E・フロム『自由からの逃走』日高六郎訳, 東京創元社, 1965年(新版), 初出1951年)329-330頁。
- 34) 日高六郎「社会時評」(『社会圏』2(3), 1948年3月)34頁。
- 35) 日高六郎「イデオロギーとパーソナリティ」(前掲日高『現代イデオロギー』, 初出1951年)75-76頁。
- 36) 島崎敏樹・飯島衛・日高六郎「座談会 心理学ブームの功罪 一つの文明批評として」(『日本読書新聞』1956年3月5日)4面。
- 37) 前掲島崎・飯島・日高「座談会 心理学ブームの功罪」4面。また日高は別の論考では、「日本における最もすぐれた社会心理学者の一人」として、鶴見俊輔を挙げている(日高六郎「社会心理学的研究における問題点」前掲日高『現代イデオロギー』, 初出1956年, 205頁)。
- 38) 鄭佳月「もうひとつの社会心理学——社会心理学研究会から社会意識論へ」(吉見俊哉編著『文化社会学の条件——二〇世紀日本における知識人と大衆』日本図書センター, 2014年)が、1950年代の日高・清水幾太郎・南博らによる、マルクス主義とアメリカ社会心理学の双方に有効性を認める独自の社会心理学の展開について論じ、彼らの問題関心は1960年代以降、見田宗介に引き継がれていくことを明らかにしている。
- なおその見田宗介は学部時代の指導教官だった日高について、「古典社会学を師弟を通じて伝承する、みたいな雰囲気からは遠いところがありました。[...] そういうものばかりであれば、わたしはそもそも社会学科には行かなかったと思います。[...] わたしが惹かれたのは [...] 「日高空間」そのものの魅力でした。自分自身の問題意識にしたがって、何をしても許される創造的な空間を作ってもらえたということが、わたしにとって大きな恩恵だったと思います。とても素敵な、フレッシュな経験でした」と述べている(見田宗介「追悼・日高六郎——「含羞の知識人」を見送る」『世界』911, 2018年8月, 233頁)。
- 39) 小坂井敏晶『社会心理学講義——〈閉ざされた社会〉と〈開かれた社会〉』(筑摩選書, 2013年)23-28頁。小坂井はさらに、「社会心理学でも一九六〇年代までの著作には、それ以降に著された論文や本とは別次元の深い哲学がありました」とも述べている(同書40頁)。
- 40) 橋本仁司「思想史として見た社会心理学の展開」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』42(1), 1997年)91-103頁。
- 41) ただし近年、たとえば前掲吉見編著『文化社会学の条件』のほか、奥村隆編『作田啓一

vs. 見田宗介』(弘文堂, 2016年)等の研究も現れている。後者の文献において、作田と見田がともに思想の科学研究会から大きな影響を受けたことは各論者に指摘される一方で、東大社会学の系譜を直接ひく日高からの思想的影響については、ほとんど言及がない。

- 42) 日高六郎「古い意識のなかのあたらしさについて——ある作家への手紙——」(前掲『日高六郎教育論集』, 初出1955年)343-345頁。引用文中の「成長する魂の弁証法」とは、「ある作家」が日鋼室蘭闘争について書いた報告文中の表現。
- 43) 日高六郎「現代社会と道德教育」(長田新監修『現代道德教育講座1 道德教育の原理』岩崎書店, 1957年)138頁。
- 44) 日高六郎「人間改造と表現能力——抑圧された意識とその解放——」(『教育』10, 1952年8月)22-27頁。
- 45) 日高六郎「マス・コミュニケーションの効果」(『新聞研究』50, 1955年9月)22頁。
- 46) 日高六郎「故郷に持続的な組織を 学生も自己を守らねばならぬ」(『東京大学学生新聞』1953年10月12日)2面。
- 47) 杉捷夫・鹽見賢吾・日高六郎・小林直樹・吉野源三郎「どこに道を拓くか——今日の学生と学生生活——」(『世界』102, 1954年6月)152頁。
- 48) 上原専祿・日高六郎・国分一太郎・馬場四郎「座談会 新しい人間関係の創造」(『教育評論』7(6)1958年4月)113頁。
- 49) 日高六郎「サークル的姿勢をささえるものは何か」(前掲『日高六郎教育論集』, 初出1959年)327頁。
- 50) 日高六郎編『1960年5月19日』(岩波新書, 1960年)86-88頁。
- 51) 日本における文化社会学が戦後に思想の科学研究会や大衆社会論へと接続していく過程を西欧マルクス主義の展開と捉えた論考として、新倉貴仁「中間の思考——文化社会学の学説史的考察」(前掲吉見編著『文化社会学の条件』)を参照。
- 52) 北河賢三は前掲「日高六郎の戦争・戦後体験と戦後思想」において、「ものごとの両面的理解あるいは対立的要素の統一的把握」が日高の思考の顕著な特徴だと述べている(141頁)。なお大嶽秀夫は『新左翼の遺産——ニューレフトからポストモダンへ』(東京大学出版会, 2007年)において、「日本の近代主義政治学も近代主義社会学(法社会学を含む)も、近代的社会制度の確立によって社会権力による抑圧は解消されるという前提があった」と述べ、それゆえ近代化がもたらす新たな抑圧の構造(近代的労務管理の権力的側面、「大学権力」、教師の権力、近代的家族がもつ権力構造等)は近代主義者の視野の外にあり、彼らが1960年代末の大学紛争の批判の意味を理解できなかったのもこのためだと評価しているが(2頁)、それは少なくとも、日高には当てはまらない。日高の思想はむしろ、大嶽が論じる「ポストモダンの発想」に親和的である。
- 53) 前掲日高『戦後思想を考える』24頁。
- 54) 日高の教育への注力が戦後思想のなかで占める位置と意味については、教育社会学者・山内亮史が重要な議論を展開している。山内亮史「「戦後思想」と「戦後教育」の普遍性——「日高六郎教育論集」の意味するもの——」その1・その2・その3(『旭川大学紀要』4・6・

8. 1976・78・79年)を参照。
- 55) 日高六郎「あとがき」(前掲『日高六郎教育論集』) 421頁。
- 56) 文部省『社会科18 個人と集団生活』(教育出版・日本書籍, 1948・49年) 35-47頁。
- 57) 日高六郎・長洲一二「声明・『日本の社会』執筆辞退について」(前掲『日高六郎教育論集』, 初出1956年9月) 237頁。
- 58) 日高六郎「新しい人間像——その現実的地盤——」(前掲『日高六郎教育論集』, 初出1952年) 39-40頁。
- 59) 日高六郎「解説 戦後思想史における教研と記念講演」(日本教職員組合編『歴史と教育の創造——日教組教育研究会記念講演集』一ツ橋書房, 1972年) 15頁。
- 60) 伊藤昇・石田雄・日高六郎・武田清子・勝田守一「道徳教育——何が問題か」(『世界』143, 1957年11月) 61頁。
- 61) 日高六郎「教育をささえる基盤をきずく——むすびつきをどう深めるか——」(『教育技術』11(4), 1956年7月) 24頁。
- 62) 各都道府県教組の草の根の活動によって自らの選挙基盤が脅かされていると判断した政府・自民党が、各校の校長に教員の勤務評定を実施させることで教組の分断をはかったのに対し、日教組・各都道府県教組は、これを教育反動・政治反動であるとして反対闘争を展開した。勤評闘争の歴史的位置については、佐々木隆爾『世界史の中のアジアと日本——アメリカの世界戦略と日本戦後史の視座』(御茶の水書房, 1988年)第十一章「一九五〇年代における教育反動の政治史的位置」, 第十二章「勤評闘争の歴史的意义」を参照。佐々木はこの論考で、戦後改革によっても温存された近代日本の地域支配構造を下から変革していく運動として、勤評闘争の意義を高く評価している。
- 63) 日高六郎「闘争力・その今日的課題」(『教育評論』76, 1958年10月) 45-51頁。
- 64) 前掲日高「あとがき」(前掲『日高六郎教育論集』) 422-423頁。
- 65) 日高六郎「学問の墓を掘るもの 文教二法と学問思想の自由」(『東京大学学生新聞』1956年4月9日) 1面。
- 66) なお歴史学者・家永三郎は教科書裁判の提訴に踏みきるとき、最初に相談したのが日高であったと述べている(家永三郎・日高六郎「国民の教育権と学校教育」日高六郎『人間の復権と解放』一ツ橋書房, 1973年, 初出1970年, 290頁)。
- 67) 前掲日高「あとがき」(前掲『日高六郎教育論集』) 423-427頁。
- 68) 黒川創『日高六郎・95歳のポルトレ——対話をとおして』(新宿書房, 2012年) 116頁。
- 69) 前掲日高「入門以前ということについて」377頁。
- 70) 晩年の日高は、かつての自身の社会心理学が「目指したものが思想的に価値があるかといえば、ほとんどゼロに近い」と述べているが(前掲黒川『日高六郎・95歳のポルトレ』88頁), こうした自己評価をも含めて、それは今日、思想的に検討する価値が大いにある問題群である。
- 71) 前掲黒川『日高六郎・95歳のポルトレ』107頁。
- 72) 長洲一二「日高六郎 どん欲な冒険家 “手持品主義”にアグラをかかぬ」(『日本読書新聞』

1961年1月1日) 1面。

- 73) 見田宗介は、「確かに日高さんは「行動する知識人」でした。しかし「行動する知識人」というと、先頭に立ってかっこよく旗を振るみたいなイメージがありますが、それは日高さんと全然違う。日高さんの行動には、いつも含羞はにかみがあった」と述べている(前掲見田「追悼・日高六郎」234頁)。
- 74) 前掲日高『戦後思想を考える』63頁。
- 75) 前掲日高『戦後思想を考える』181頁。

